

多くの企業との協働作業で、 自立型安全管理を追求

地域からの理解と信頼を得ることがこれからの時代には重要であるとの考え方から、社会貢献活動を展開。建設業労働安全衛生マネジメントシステムを積極的に運用し、「災害ゼロから危険ゼロ」を合い言葉に活動している。

株式会社イチテック・愛知県

労働災害をなくし、地域から認められる企業へ

機械の配置や製品の置き場所が決められている工場であれば、動線の管理は比較的行きやすい。ところが土木建設業の場合、作業環境は現場によって大きく変わる。平らな場所での作業もあれば、橋梁のような高所での作業、あるいはトンネルや地下といった場所もある。さらに炎天下もあれば、風や寒気の厳しいときなど、気象条件によっても作業環境は変化する。同じ現場であってもいくつもの企業が参加し、作業の進捗によっても作業環境は変化していく。ちょっとしたミスや作業員同士の連携の仕方によっては、事故につながる可能性がある。そのため、土木建設業は特に厳しい安全管理が求められる。

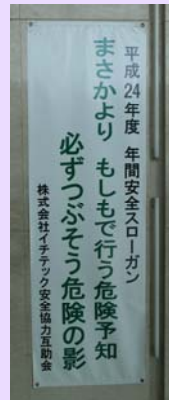
社会基盤整備事業は地域との関連が深い。工事の必要性を地域住民に理解してもらうことが大切になってくる。もちろん、工事に携わる企業のすべてが開発計画そのものに最初から携わるわけではないが、現場で事故が起きれば、さまざまなところへ影響を与えかねない。

日本のバブル景気崩壊は土木建設業界にも影響を与えた。先の見えにくい中で、企業として存続していくには何が必要なかが問われていた。従来から人命尊重を最優先として事業に取り組んできたイチテックだが、地域住民に理解され、信頼関係を築きあげていくことこそ、これからの企業として生き残るには重要だとの発想から、それまで以上に安全衛生と同時に社会貢献のできる企業を目指すことになった。

ダミー人形による労働災再現訓練



協力会社も含めて
募集した
安全スローガン



イチテックの
3マネジメントシステム



プリントして廊下に貼り出された社内報



川と海のクリーン大作戦(木曾川)



平成23年(設立65周年)にキャラクター「いちけん君」が誕生。
名前は旧社名「一宮建設株式会社」に由来している。
一宮建設株式会社時代に培った実績・情熱・技術を引き継ぎ、
未来へと繋げていくという思いをこめ、旧社名に名残のある「いちけん君」と命名。

コスモス評価サービス事業の第1号

1998年(平成10年)に第1回の労働災害事例模擬体験訓練を実施した。全国で初めてマネキン人形などを使い、転落事故や巻き込まれ災害を現場でシュミレーションし、それを映像で撮り、安全教育に使用している。その年に建設雇用改善優良事業所として労働大臣賞を受賞した。模擬訓練画像はイチテックのホームページ (<http://www.ichitec.co.jp/>)でも公開されている。

厚生労働省は1999年(平成11年)に「労働安全衛生マネジメントシステムに関する指針」を制定した。建設業労働災害防止協会は、この指針に建設業固有の特性を加え、それまで各企業が個々に行ってきた安全基準を統一し、「建設業労働安全衛生マネジメントシステムガイドライン」(通称コスモス)を定め、より多くの建設企業への普及に努めることになった。イチテックもコスモスのマニュアルと規定集を構築し、翌年から運用を始めた。2001年(平成13年)には全国建設労働災害防止大会で「㈱イチテック建設業労働安全衛生マネジメントシステム」の研究発表を行い、中央労働災害防止協会会長賞を受賞した。そして2003年(平成15年)にコスモス評価サービス事業の第1号としての認定を受けた。

協力会社と共に安全パトロールを実施

イチテックが元請けとして仕事を受注すれば、多くの協力企業を監督することになり、万が一、事故が発生すれば、元請けとしての責任が問われることになる。当然、新規での現場での作業を開始する前に、協力企業を集め、注意すべきチェックポイントなどの安全教育を実施する。しかし、工事が始まれば現場は刻々と変化するため、毎日の現場での安全確認はもちろんであるが、毎月2～4人からなるチームによる安全衛生パトロールで各現場を回り、安全の確認、評価を行う。毎月のパトロールのうち、2回に1回は協力会社の社員も同行する。安全衛生パトロールの結果は、毎月行われる安全衛生委員会で検討し、是正すべきことなどを社内で報告する。

イチテックと協力関係にある企業は約100社で、これらの企業と安全協力互助会を作り、3カ月に1回は安全衛生協議会を実施する。ここで安全パトロールの結果をまとめたものを、協力会社に報告する。

安全衛生委員会は、会社側と社員側とで普段は16～18人で構成されているが、平成24年度はとくに安全に力を入れるということで、22人で構成された。いずれにせよ、社員数から考えると、委員の人数は多い。現場の数が多いということもあるが、安全衛生委員となるのは工事に直接関わる社員だけではなく、営業や総務なども加わるからだ。例えば、熱中症対策として必要になると思われる物品などは、現場を知らないと分からないものもある。現場を見て、現場の声をスムーズに汲み上げ、安全作業が行えるように先手を打つためだ。また、総務部からはその日の予想最高気温や湿度などのデータを各現場へ送り、注意を喚起するといったことを行う。

全社員に対しては、毎月2回、土曜日の夕方に講習会を実施、約1時間、専門的知識を持った社員が持ち回りで、毎回テーマを変えて講習する。本社から離れた現場にいる社員のためには講習内容をDVDで録画して配布する。講習内容は安全教育だけではなく、社会貢献や原価管理、入札制度、防災、ISO関係、コスモスのことなど、多岐にわたる。

社内報も安全教育に活用

地域との信頼関係を築き安心安全な企業を目指すため、建設業労働安全衛生マネジメントシステム、品質マネジメントシステム、環境マネジメントシステムの3つのマネジメントシステムを実施している。1999年（平成11年）にはISO9002品質マネジメントシステム、2010年（平成22年）にはISO14001環境マネジメントシステムを登録した。

社会貢献活動にも積極的に取り組み、地元の河川清掃活動のときなど、川へ安全に降りることのできる昇降設備を設置したり、収集したごみを処理場まで運搬するための手伝いなどを実施している。現場が多岐に分かれ、社員が一堂に会することができる機会は限られるため、こうしたさまざまな活動は若手社員が中心となって編集する社内報をグループウェアで発信することで情報を共有し、社員への安全教育にも役立てている。